

野球を通してつながるコミュニケーション

氏名：放生優希

活動場所：セブ島（フィリピン）

〈野球を通して埼玉県を PR〉

留学中に現地「Cebu Dreamers」の野球活動に参加しました。いまだセブ島からプロ野球選手が誕生していない中、日本人のコーチングと共に上の世界を目指している姿に感銘を受けました。

活動を通して彼らと交流する中で、私は自分の出身地である埼玉県を紹介し、特に埼玉が誇るプロ野球チーム「埼玉西武ライオンズ」について話しました。私は、埼玉西武ライオンズがどのように地域とともに歩んできたか、またファンとの強い絆をどれほど大切にしているかを伝えました。選手たちが子どもたちとふれあうイベントを開催したり、地域貢献活動を積極的に行っていることなどを紹介することで、埼玉県が単なる「野球チームの本拠地」ではなく、スポーツを通じて地域が一体となる温かい場所であることを PR しました。また、埼玉西武ライオンズは多くの名選手を輩出しており、日本プロ野球を代表する伝統ある球団の一つです。私は、セブの選手たちにもライオンズのように地域に支えられ、夢を持って努力を続けてほしいという思いを込めて話しました。

〈フィリピンでの生活〉

水に関しては、飲料水や歯磨きの際に、学校に設置されていたウォーターサーバーの水を利用していました。しかし、中にはその水が体に合わず、スーパーでペットボトルの水を購入して使用する人もいました。現地の日本人の間では「水が合わずにお腹を壊すのではないか」という不安があり、多くの人が日本から整腸剤や下痢止めなどの薬を持参していました。

実際には、薬を使うほど体調を崩す人は少なかった印象ですが、胃腸が弱い人や、過去に海外でお腹を壊した経験のある人は、体調を崩しているケースが見られました。私自身は、外食時にレストランで提供される水を飲むこともありましたが、滞在中の2か月間でお腹を壊すことは一度もありませんでした。

授業は1コマ45分で、1日に8コマの授業がありました。授業時間は朝8時から午後6時までで、昼休みを挟みながら8コマをこなしていました。

そのうち3コマはグループクラスで、クラスメイトは韓国・中国・台湾など、さまざまな国籍の学生が在籍していました。グループクラスの1つはネイティブ講師による授業で、発音や自然な表現を学ぶ良い機会となりました。

空きコマは3コマあり、その時間には宿題をしたり、昼寝をしたり、友人と会話をしたりして過ごしました。

残りの5コマはマンツーマンレッスンで、リスニング、文法、リーディング、ライティング

グ、スピーキングの5技能をそれぞれ学びました。マンツーマン形式のため、自分のレベルや課題に合わせて授業を進めることができ、効率よく学習できたと感じます。

〈フィリピンの国民性〉

フィリピンの人々は、日常の中でとても明るく、前向きに生活していると感じました。特に学校の先生方はいつも笑顔で接してくださり、私の英語を積極的に褒めてくれました。私が英語で言葉に詰まったときや、聞き取れなかったときでも、「あなたの英語力は確実に上達しているよ」と励ましの言葉を何度もかけてくれました。その温かい言葉のおかげで、失敗を恐れずに英語を話す自信を持つことができました。また、学校の食堂で働いていたスタッフの方々も、いつも歌を口ずさみながら楽しそうに働いており、仕事を心から楽しんでいる様子が印象的でした。

さらに、旅行先でも日本語で話しかけてくれる人が多く、タクシーの運転手も気さくに会話をしてくれました。どんな場面でも人々はフレンドリーで、話しかけても冷たくあしらわれることはほとんどありませんでした。このように、フィリピンの人々は非常に社交的で、他人とのコミュニケーションを楽しむ国民性を持っていると感じました。明るく前向きな姿勢や人懐っこさは、フィリピン社会全体に共通する魅力の一つだと思います。

〈野球の活動〉

私は現地学習のほかに、セブ島の野球団体「Cebu Dreamers」の活動に参加しました。

マニラでは野球が比較的盛んに行われている一方で、セブ島では野球文化がまだ十分に発達しておらず、野球に力を入れている団体は多くないと伺いました。特に、練習場所の確保が難しく、学校側から許可を得なければならないため、活動は不定期に行われているそうです。

そのような限られた環境の中でも、現地の学生たちはとても熱心に練習に取り組んでいました。高校生と大学生と一緒に練習しており、私は投手としての経験を活かして、主にピッチャー陣への指導を行いました。

彼らは同年代でありながらも、学ぼうとする姿勢が非常に強く、「上手になりたい」という意欲にあふれていました。英語で技術的な説明をすることは簡単ではありませんでしたが、真剣に耳を傾け、理解しようとする姿勢に私自身も大きな刺激を受けました。

Cebu Dreamers は「セブ島からプロ野球選手を輩出すること」を目標に掲げていますが、実際の活動環境は決して恵まれているとは言えません。グローブやボールなどの道具が十分にそろっておらず、ボールの中には破れてボロボロになっているものもありました。それでも、彼らは限られた道具を大切に使いながら、楽しそうに野球に取り組んでいました。その姿を見て、私は「環境や条件が整っていなくても、努力と情熱があれば前に進むことができる」ということを強く感じました。彼らのひたむきな姿勢と野球を純粋に楽しむ気持ちは、私自身にとっても大きな学びとなりました。

